遺　言

有森信二

博史は、歯朶の葉を上って行く蟷螂(かまきり)の姿を追っていた。十センチ近い大蟷螂は、風に揺れながら立つ歯朶の葉に足を掛け、幾度も足を滑らせながら、中程を上りつつあった。ところが、上ったと思ったところで歯朶の葉は風に煽られ、右に左に揺れ動くのであったから、蟷螂は逞しい前脚で葉を掴んではいたが、懸命の努力にも拘わらず一段、二段とずり落ちてしまうのである。

いったい大蟷螂が、なぜ歯朶の葉という頼りないものの上を這い上ろうとしているのであるのか。すぐ傍には、棒杭もあるし、刈り込まれたラカン槙の垣もあった。

獲物が何なのか、何を狙って上ろうとしているのか。長い経験を積んだであろう大蟷螂であるから、歯朶の葉の類がどれほど不如意なものであるのか、多分知り尽くしている筈であろうに。

博史は枕元の水差しを掴むと、一滴だけ唇に受けた。ただの水に過ぎない水差しの中身を一口吸い込むことさえ、今は難渋した。というより、受け付けないのである。

先刻まで、上半身を幾分高くした恰好で瞼を閉じていた。痛み止めの処方により、自分の体の様をかろうじて保ってはいるが、心は既に萎えかけていた。

先刻までの閉じた瞼の裏には、清澄な建物の内に、幾万とも幾十万ともつかぬ蝋燭の置かれた場があり、その殆どがもはや炎を持たないのであった。と、博史が見詰める目の前に、後一ミリもないほどに燃え下がり、炎の色は薄青く、喘ぎはためく炎があった。誰に問わずとも、博史にはこれが自分の命の炎なのだということが分かった。

四囲には見事な炎が高く静まり、あるいは中程まで下りて一際激しく燃え上がる炎などがある。が、誰のものであるのかは分からない、という耳の奥に伝わる声を聞き、同時に、例えようもない雅の音曲が炎の中にあるのを知った。音曲は、炎を持たない空間にもさやかに流れていた。

博史の心に、ある決定的な考えが閃いた。鈴を振った。妻、長男、二男、三男ら、居合わせた者全員が急いで集まって来た。「爺ちゃん、どうしたの」と孫の声だ。

少し頭を下げた。普段叱り付けもしないが、頭など下げることもしないので、何人かが互いに目配せをした。

「みんなに頼みがある」

弱々しい声であるが、博史はゆっくりと言葉を続けた。

「墓も立派に建て直し、後継も決めた。ところが、このところ毎晩夢枕に立つ者があって、妙なことを言う。最初は変な奴めと思っていたが、何だか身に染みてきてな。これ

から行かねばならぬところがあり、これからやらねばならぬことがあると言う。その者の話から察するに、この地に残していく物事など、大事ではないとのことなのだ。見栄よくやる葬式も無意味なことだし、骨は適当に撒いてくれてもよい。後継のことなど無理を言ったのだったが、誰もがそれぞれの負担にならんようにしてくれ」

子供たちは、一様に信じられないという顔で口を開けたままでいる。

「無論、喜んで後継をしてくれるのなら、それはそれで有り難い。その場合は、後継者に諸々を任せたい。しかし、無理はせんでくれ。誰かが言っていたが、墓は違う場所、つまり本山などに移し、永代供養をするというのも悪くはない。この地には先祖の誰も、もはやいないのだ」

「ほんの今まで、全く違うことを言ってたじゃない」

博史は、四代目の自分はきちんと後継者を決め、田畑や山地を完全に譲り渡し、先祖の供養をこの地で行ってもら得るよう、手筈を整えてきた。そうすることが、先祖を始め、子供たちにも、親族にも、地域の誰にも納得の得られる方法なのだと考えたのだった。

世情は激しく動いている。田畑を耕しての生活はとうの昔に成り立たなくなった。世間並に、子供たちには乏しい家計をやりくりし、それなりの学問をさせた。

学業を修得した子供たちは、就業の地をこの地から遠く離れた街中に求めた。そして、順々に定年を迎えた。

後継を決めるに際し、子供たちは「どうしても、この地に住まわねばならないか」、「少子化の時代であり、もはや次の次の後継は考えられない」、「家父長制度は今はなく、後継ということ自体無意味だし、縛り縛られる筋のものではない」、「墓はこの地と定めず本山に場を移すことで、それも永代供養という、むしろ粗末にしないという方法もある」という類の意見を言った。

「これからは、世界が相手になる。どこにだって行かねばならなくなる。この地に戻れないことも多く出てくる」

「この地のどこが悪いとかではなく、どこでもよいという発想に切り替えないと、真っ先に潰れてしまう」

博史は、苦々しい思いで子供らが言い募るのを聞き、「誰のお陰で成長し得たのか。この恩知らずの親不幸者めらが」と怒鳴り付け、一存で後継を指名したのだった。

博史はみんなに下がってもらうと、再び瞼を閉じた。蝋燭の炎が大きく揺らぎ、やがてフッと消えゆくのだと知れた。後いくばくか。それでよいではないか。

大蟷螂が歯朶の葉とともに後ずさりながら揺れているのが、いかにも自分に似ていると思えた。

了